

# 「妙本」の位置

——唐玄宗『老子注』の一特質——

堀池 信夫

## (一) はじめに

『老子』注釈の歴史において、唐の第六代皇帝玄宗<sup>(1)</sup>の手になる『老子注』である『道德真經注』、およびその疏解たる『道德真經疏』において目立つのは、それ以前にあま<sup>(2)</sup>り論ぜられることのなかった「妙本」という哲学的概念が登場してくることである。

『注』と『疏』とは、ともに玄宗の名前が懸けられているが、『注』は玄宗が集賢院学士陳希烈等の侍講により著したものであり、玄宗自身の『老子』解釈の意図を直接に反映する、ほぼ自著といえるものである。一方『道德真經疏』は、玄宗の意を受けた集賢院学士や道士たちが、『道德經注』の解釈をより発明せんとして著したものであり、奉勅撰といったたぐいのものである。両者には方法的にも差異があり、たとえば典故のある文章の場合、『注』

はほとんどその出典を明示しないし、そもそも典故そのものがそれほど多くはない。一方『疏』の方は、『注』に比べると典故を利用する機会が多く、しかも多くの場合その出典を明示している。『疏』の方が学問的には丁寧なものとなっている。

こうした『道德真經注』と『道德真經疏』において、ともに「妙本」という概念が現れてきているのである。このことはつまり、玄宗に関わる『老子』解釈においては、「妙本」の概念が中心的なものではないかという予想を生む。従来、一般に、『老子』の中核的思想として指摘されるのは、「無」や「道」、あるいは「無為」「無名」「自然」などであった。これらに比べると、「妙本」という語は目新しく、聞き慣れないものである。当然ながらこの「妙本」とはいったい何なのか、ということに興味を湧くであろう。

## (二) 玄宗の『老子』解釈の核心

「妙本」が玄宗の『道德真経注』および『道德真経疏』において目立つということ、それがまた玄宗「注」「疏」の一特色を示している、ということでもある。<sup>3)</sup>そしてそれが特色的であるということは、それが玄宗の『老子』解釈において、もつとも重要、中核的概念であるということを示唆するだろう。

この予測は、実際正しいのであって、玄宗自身が天宝元年(七四二)の「道德(経)を分かちて上下と為すの詔」(『冊府元龜』卷五十四)において、

我が烈祖玄宗皇帝(老子)は、乃ち妙本を發明し、生靈を汲引し、遂に玄経五千言を著し、用て時弊を救う。

と述べている。つまり、玄宗自身によって「妙本」が『老子』の中核的概念であることが示されているのである。もう少し説明するならば、唐朝廷室の祖先とされていた老子の名の下に、その老子が「妙本」を發明し、それによって生きとし生けるものの靈魂と社会の救済が可能になったとするのである。「唐朝の元祖」たる老子と、それを背に負って王朝統治を行う玄宗との、二重の勢威を背景に、「妙

本」の威力は、まことに、世界を貫き覆う、絶大なるものとして構想されていたといえるだろう。

そして玄宗は、開元二十一年(七三三)年に、士庶各家に『老子』一本を架蔵せしめよとの制令を下したのを皮切りに、その後さらに『老子』注疏の架蔵などを数度にわたって詔している。そしてまた玄宗は、『玄宗注』『玄宗疏』を『老子』解釈の模範テキストとして全国に採用させる方策をもとっていた。かくして玄宗の『道德真経注』『道德真経疏』は、唐一代にわたり、もつとも標準的なテキストとして用いられることになったのである。そしてそれは、おのずからこの時代の『老子』解釈の方向性を決定づけるものとなつていったといえるのである。

## (三) 「道」と「妙本」

それではまず、「妙本」が具体的にはどのようなものとして捉えられていたのかの一端を窺つてゆくことから始めよう。もちろん「妙本」は「注」「疏」の両者にわたり、中心的なものとして現れてくるもので、「注」「疏」いずれにとつても重要な概念である。ただし、今は、両者にわたつてフラットにそれを検討するのではなく、まず玄宗自身の著述としてより直接的なものと考えられ、しかも形式的

には解釈として『疏』に優先すべき『注』に、焦点を絞ることとした。そして玄宗自身が示そうとした「妙本」の様相を明らかにすることを目指したい。

『道徳真経注』開卷冒頭第一章の玄宗の注は、いわゆる『老子』の「道」「無名」に関わりつつ、次のようにいう。

道とは虚極の妙用なり。(第一章注)

道は常に無名なり。無名とは妙本なり。(第一章注)

まず第一の文であるが、いわゆる『老子』の「道」とは、まず「虚極」なるものの「妙用」であるという。「虚極」とは、『老子』第十六章の玄宗注に、

虚極とは妙本なり。(第十六章注)

とあることから、それは「妙本」のことということになる。そこでこのことを第一の文に代入するなら、「道とは妙本の妙用なり」ということになる。「妙用」については後ほど詳述することにするが、今ここでは「用」に注目して、取りあえずそれを「働き」の意味に解しておく。すると、要するに第一の文は「道」とは「妙本」の「働き」を言うものということになる。

続いて第一章注の第二の文である。その後半からいうと、「無名」とは「妙本」である、というのであるが、ここで前半に戻ると、その「無名」とは「道」の常なるあり

方を示すものとされている。そこで「道」は、「妙本」のある種の状態・あり方として顕現しているもの、ということになる。つまり「道」とは「妙本」のある種の（すなわち無名的な）有りようを表しているもの、あるいは「道」は「妙本」のある一側面を示すものということになる。これについては次の第三十九章注の文が、このことの補強的役割を果たすだろう。

物、道の用を得れば、用に因りて名を立つ。用失われれば而して実喪ぶ。(第三十九章注)

かくして、第一章注の二つの文の分析から、「道」とは「妙本」の全体からすると、そのある種の限定的一側面を示すのみのものということになり、それゆえ「妙本」はどいうやら「道」に上位するものであるらしい、ということが見えてくる。つまり「妙本」と「道」との関係性が、ここでおぼろげながら見通し始められることになる。だが、だからといって、第一章注の二つの文のみの分析で、そのことが完全に論証されたとはとてもいえない。さらにその点をはつきりと詰める必要がある。そこで、先に一部を引用した所だが、『道徳真経』第十六章注の文をここで全体的に引用する。

虚極とは妙本なり。言うところは、人、生を受くる

に、皆、虚極妙本より稟くるも、形、受納有るに及べば、すなわち妙本、離散す。(第十六章注)

この文の冒頭の、「虚極」とは「妙本」である、という点についてはすでに見た。ここではすぐに続けて「虚極妙本」と、二語を重ねて一語として取り扱う例が示されている点に注目する。「虚極」は「妙本」であるが、それはまた「虚極妙本」と一語で表される概念でもあるとされているのである。そしてさらにその「虚極妙本」とは、人間にその生を付与するものであるとされる。この場合、人間に生を付与するという、人間に限定された特殊な場合が示されているのだが、これを一般的に敷衍するのなら、それは存在者の根源としての性質をもつものとされているということになる。そしてここにおいてもまた、「妙本」の位置の見通しがさらにもう少し明るくなるだろう。

ところで、先には第一章注の「道とは虚極の妙用なり」は、十六章注の文を代入すると「道とは妙本の妙用なり」となることを見た。また同じく第一章注「無名とは妙本なり」という文は、「妙本の無名の働きの有りよう」を示すものでもあった。そこでここにおいて、先に一応「妙本」の「働きの」と解しておいた「妙用」について、少し細かく検討する。

まず、「妙用」の「用」であるが、これについてはあまり複雑に考えるべきではないだろう。先に見たように、単に「機能」「働きの」という意味で捉えておいて大過ないと思う。むしろこの場合、「妙用」の「妙」が重要である。

この「妙」の意味は、引用文の流れからして当然ながら、「妙本」の「妙」と異なるものではないといえる。それはまた、当然ながら「老子」第一章「常無欲にして以てその妙を觀」「衆妙の門」の「妙」と同じものであると見るのが、注釈という性格からしても妥当といえる。そこで、この『老子』の「妙」は何かというと、その解釈は歴史的には実はさまざま・多様であつて、実際には今ここで一々検討するには煩瑣すぎるものである。最大公約数的に絞つてその意味を規定しておくしかない。そしてそれは結局の所、「優れた」「不思議な」「微妙」「玄妙」で「奥深い」、というような意味に帰結する他はないのである。

そこで、先の引用文についてさらに考えを進める。「道とは虚極の妙用なり」を単純に置換すると「道とは妙本の妙用なり」ということになる。これは先に導出した見方を単純化したものとして受け取れる。そして「妙」を先に見たように形容詞的なものとして、さらにここに代入してみると、この注の意味は、いわゆる「道」とは「妙

本」の奥深く微妙な働き・機能である、ということになる。つまりこの場合、「道」は「機能」的な意味において用いられているのであって、何らの具体的実体を伴うものではないのである。しかもそれが「妙本」に対しては下属するものとされていることも、ここに明白に見ることができる。つまり「妙本」は「道」に優越する位置づけが与えられているということがはっきりするのである。とはいうものの、しかしながらここまでの論証は、まったく推理的論証によるものにはすぎず、それだけで全てを論証し終えたなどといえるものではない。

そこでさらに、「妙本」の位置については、より直接的に文面に出されている用例を見てみなければならぬ。

『老子』第二十五章「有物混成」への玄宗注に次のようにある。

物有り。混然として成り、一切を含み孕む。その生化を尋ぬれば、乃ち天地の先に在り。有物の体は、寂寥虚静たり。妙本は湛然として常寂たるが故に、独立して改めず。応用は群有に偏きが故に周行して危殆せず。而も万物は資りて以て生成し、その茂養の徳を被るが故に、以て天下の母と為すべし。

「妙本」は、はるか宇宙の成立以前から、存在者の根源

において、湛然として有り続けたものであり、その働きはあらゆる存在者に行き渡っている。あらゆる存在者はそれによって「依拠して」生まれ、しかもその働きによって成長させられている。これが右の文の要点である。このような「妙本」の位置づけは、それが「道」を含めたありとあらゆる物の以前にあるもの、あるいは越えているものであることを示している。

加えて、玄宗が「妙本」を宇宙生成に先立つものであり、しかもその宇宙を存在せしめているものでもあると捉えていたことは、また次のような注釈によっても了解できる。

妙本、気を見わして、天地を権興す。天地、資りて始まるが故に、無名という。(第一章注)

妙本、動用して和氣を降す。物、得て以て生じ、万類を養う。乾、知（「おさ」めて、坤、作（「おこ」り、形位、兆（「あら」われ、寒暑の勢いおのおの成り遂ぐ。(第五十二章注)

#### (四) 「妙本」の超越性

以上によれば、玄宗注における「妙本」の概念的位置は、「道」を含めて従来『老子』解釈において示されてい

た哲学的な種々の概念を、すべて越えるものとして設定されているのであり、それはまったく明白であったといえるのである。だがここではさらにしつこく、「妙本」が「道」を越えてその上位に置かれていることを、玄宗の『老子』への具体的注釈作業の中に見て、以上のことを決定的・確定的に押さえたいと思う。その例として、第四章の本文と注釈を取り上げる。

『老子』本文・道は沖にして之を用い、或いは盈たず。淵として万物の宗に似たり。

玄宗注・道は常に物を生じて盈滿せず。妙本は淵として深静なるが故に万物の宗主たるに似たり。

通常、この本文は、「道」が文全体の主語であり、「或いは盈」たざるものも「万物の宗に似」るものも、ともに「道」であると解されている。ところが玄宗は、この本文を二つに分け、それぞれに主語は違うものとしている。すなわち、「或いは盈」たざるものは「道」であるが、「万物の宗」は「妙本」である、と。「道」にはある種の運動性ないし機能的要素を見、これに対して「妙本」には静寂不動を見ようとしているのである。玄宗は、はっきりと「道」と「妙本」とを区別し、「道」は動、「妙本」は静とし、「妙本」により高次の位置を与えようとしていたとい

えるのである。そしてこれら「道」と「妙本」の概念的先後関係については、玄宗は第四章の続く本文への注において、明確に示している。

『老子』本文・其の光に和し、其の塵に同じくす。

玄宗注・道は在らざる所なし。在る所は常に无なり。

光に在りて、塵に在りて、皆ともに一となる。一なるものは光塵のみ。而るに妙本は光塵に非ざるなり。

『老子』本文・湛として存するに似たり。

玄宗注・和光同塵するも、而るに妙本は雑らず。故に湛として存する所有るに似たり。

玄宗によると、「道」のあり方は常に「无〔無〕」であるという。そしてその「无〔無〕」とは、「道」自体が何も「無」という表象において捉えられない、というのではない。「道」が常に何ものかと「一」なるものになりあつてゐるもの、として現れてくるものであるというのである。この場合、光や塵がその何ものかであつて、「一」として現に認識しうるものは光や塵であるが、しかしその光と塵には実は「道」が相即して、「一」になりあつてゐるのであつて、「道」はそういう何ものかと一体化してしまつてゐるのである。そういう意味において、それ自体は

「無」だと表現される、と玄宗はするのである。しかしそれはあくまでも光塵と一体となってそこに有るものである。あるいは、光塵には「道」が併在しているといつてもよいだろう。

一方「妙本」については、玄宗は「光塵に非」ざるものと断言して、「道」のごとく光塵に相即して「一」になりあつて、いるものではないという。そして続く注釈においては、「妙本」は「道」のごとく何ものかと雜りあうことのない、いつてみれば純正なるものであるとしている。すなわち、ここには「雜」なる「道」に比して、「妙本」の「不雜」性ないし「純粹」性が説かれるのである。

#### (五) むすびにかえて

以上、『老子』の玄宗注においてひとときわ目に付く概念である「妙本」について、主にその超越的側面を中心に分析を進めてきた。その結果、玄宗は「妙本」の概念に、従来の「道」概念を越える高次の位置づけを与えようとしていたということは疑うことができぬものであることが明確となった。しかしながら、以上のことに反するような事実であるが、玄宗注の「妙本」には、従来の「道」を越えるものではない、従来の「道」とほぼ等同の内容しか与えら

れていないと見なければならぬような部分も、実は存在している。以下の二つの文を見比べる。

妙本、動用して和氣を降す。(第五十二章注)

道、動きて沖和の妙氣を出す。(第四十二章注)

つまりこれらのように、「妙本」と「道」とには差異はないと見ざるをえない所が玄宗注にはあるのである。そしてそのことの解釈については、まず「道」と等同なる「妙本」という概念に關してより詳細なる分析を必要とするであろう。そしてその併存はいかなる論理においてなされているのかの分析も必要である。さらに加えて、その事態はいかなる理由によって惹起されたものであるのかの論証も必要であろう。

しかし今は、これらのことについて論ずる準備は整っていないし、またそれを論ずるための紙数もなくなつた。よつて、これらの問題についてはまた稿を改めて論ずることにした。

#### 注

(1) 皇帝代数からは、則天武后と殤帝を除いた。

(2) 集賢院字士たちが玄宗の『注』『疏』の作成に関わつていたことについては、『冊府元龜』卷五三、尚黄老、開元十八年・

開元二十年の条を参照。

(3) 「妙本」に関する先行研究について鳥瞰してみると、現在の所、その解釈は大きく二つの立場に分かれているように見える。まず「妙本」の超越性を重視する立場である。「玄宗注疏」にあつては、「道」は「虚極の妙用」であり、「虚極妙本の強名」であつて、「妙本」こそが世界の根源にある究極的な存在を表象しうる唯一の概念であるという明確な意識が存在する。

……玄宗注疏においては、「妙本」が現象世界の根源的実在とされている（麥谷邦夫『唐・玄宗『道德真経』注疏における「妙本」について』（秋月観映編『中国の宗教と文化』平河出版社、一九八七）という麥谷説が、その代表である。もう一方は「妙本」と「道」とを等同、ないし「妙本」を「道」の形容的なものとする立場である。「妙物もしくは妙本とも言うしか名づけようのないそれは、一切万物のそれぞれを表象する日常的な言語によつては決して表象しえないが故に、本来無名であるが、すべての存在に通じかわるという点から、強いて名づければ、道とも呼ばれるべきであろう。……探求の果てに、唯一者、妙本としての道にたどりつくことができたとするなら、この道はその限りにおいて、まさしく万物の始源であると言えるであろう」（中嶋隆蔵『六朝思想の研究』平楽寺書店一九八五、七〇二頁〜七〇三頁）との中嶋説に代表される。つまり「妙本」を超越的なものと捉える立場か、超越的なものは「道」であり、「妙本」は「道」と等同ないし「道」の形容的なものにすぎないと捉える立場かの、二つの対立的解釈が

現在における主要な説であるといえるのである。たとえば、砂山稔『隋唐道教思想史研究』平河出版社、一九九〇、三三三頁〜三三三頁）は、「道」を「虚極」「妙本」が万物を生成する作用と捉える」と述べており、「妙本」を超越的なものとする立場に立つ。一方、島一『玄宗の『道德真経』注疏について——理国と理身——（上）』（立命館文学）第五二三号、一九九二、八一頁）、同『玄宗の『道德真経』注疏について——理国と理身——（下）』（立命館文学）第五二六号、一九九二、五五頁）の「妙本」の解釈は、明らかに中嶋説を前提していると見られるのである。

(4) 老子が唐朝の祖先であるという説は、唐の廷室の姓が「李」であることにより、唐代になつてから叫び出されたことである。それが厳密にいづころのことであつたのかというと、不明というしかないが、唐太宗の貞観十一年（六三三）、帝が「朕の本系は柱史（老子）より出ず」（全唐文）六」と述べている所からすると、太宗の時期には相当広く行われるようになっていた説であろう。

(5) 『旧唐書』『玄宗本紀』

(6) 「妙本」の概念の主な先行用例は成玄英にある。玄宗「注」における成玄英の承授の問題については稿を改めて述べたいと思うが、ただ一点、指摘しておきたいのは、「妙本」のこうした性格はまったく玄宗注に独自のものであつたということである。

(7) 本稿の注(3)に示したように、先行研究の「妙本」の解釈

は、これらのどちらかの立場に立ちつつ、それを強調するといふ性格の濃いものであった。これら二つの立場の併存を、いわば前提とした上で、考察を進めようとの方向性をもつ論考は、現在の所ほとんどないといつてよいだろう。

(8) その理由については現在の所、玄宗自身の政治理念のあり方によって引き起こされたものであろうの予測を立てているが、これについては、やはり一層明瞭な論証が必要であらう。

(筑波大学)